

C??H?

リフォン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アズールレーンの小説見ないな……↓よし、自分が書こう！ とう初心者が書いたものです。しかも物語はほのぼの系にするはずだったのに……いつの間にか恋愛してる始末。それでも良い方は、ゆっくりして見て行ってね！

目次

重桜 駆逐艦 綾波	1
ユニオン 重巡洋艦 インディアナポリス	11
ユニオン 軽空母 ロング・アイランド	20
ユニオン 駆逐艦 グリッドレイ	30
鉄血 重巡洋艦 プリンツ・オイゲン	37

重桜 駆逐艦 綾波

綾波……です。「鬼神」とよく言われるのです。
よろしくです。

今日も綾波は指揮官のところに向かいます。綾波は秘書艦なので……お仕事のお手伝いをしなければなりません。

指揮官は、あまり出撃をしない人ですが、いつも忙しそうにしているのです。

この前見た書類では……

『紅茶を仕入れていただけませんか（ベルファスト）』

『フィッシュアンドチップスを買いたい（シグニット）』

『もうダメだにや……（経済的に）ピンチだにや……指揮官早く買いに来るにや（明石）』

等々、色々な方からのお願いが書かれていました。

……かくいう綾波も指揮官に『通信設備を整備するために必要なものを買いたい』とお願ひして一緒に来てもらったことがあります。

あの時に一緒に食べたパスタは……美味しかったです。はい。

……ともかく、そういうものもあって大変な指揮官のサポートをするのが秘書艦のお仕事です。

この前までは新しく来たオーロラさんを秘書艦にしましたが、彼女の練度が三十くらいになってから、また綾波が秘書艦を担当することになったのです。

これは、前からの事です。新しい人が来ると指揮官はその人を秘書艦とし、この艦隊にすぐに慣れるようにします。

そして、もう十分かな、と指揮官が判断した時に秘書艦から外して、その代わりに……綾波が入ります。

……なぜずっと綾波が秘書艦にいるか？それは綾波には分かりません。

最初からずっと指揮官を支えています。流石に指揮官の全てを知るわけではありません。

一度指揮官に聞いてみましたが、「……そうか、綾波ばかりに秘書艦をやらせるのも悪いし、変えようか……」と言われたので必死に弁解して終わってしまいました。結局理由はわかりません。

秘書艦でいることが嫌いなわけではありません、むしろ指揮官の近くに居れて……嬉しい、です。

だから、理由がなんにせよ、指揮官が綾波を側においてくれるならそれでいいと思いました。

そんな事を考えてると指揮官の部屋が見えてきました。お仕事は大変ですが、頑張るのです。

コンコン

「指揮官、綾波です。今日も一日……よろしくお願いします」

あ、そうだ。

「指揮官は食べました？ おやつ、です」

朝からおやつというのは違和感があるかもしれませんが、これは、最初からずっと続けている綾波と指揮官のコミュニケーションの一つなのです。

……けっして、綾波が甘党だからおやつを勧めてるということではありません。

指揮官の作業部屋はとてもシンプルです。作業机と資料棚と、来客用のソファと机、あとはラファイーちゃんが持ってきた観賞用の花が一輪飾ってあるくらいでしょうか？

指揮官の個室も行ったことありますが、そちらも特に目を引くものはありません。ベッドと机と衣服を入れるタンスがあるのみです。

この前サンディエゴさんがいろいろと指揮官の部屋に置いていきました。それらは既に撤去されているようです。……メガステージを見た時ちよつと踊ってみたいと思ったのは秘密、です。

「……………」

「……………」

指揮官はいつも静かな人と言う訳ではありませんが、こういう作業に集中していると無言になります。

そして私もあまり必要以上に喋らないのでペンが走る音しか響きません……が、この雰囲気は割と好きです。

最初の頃から、指揮官と頑張ってきた綾波にとって、この空間はずっと慣れ親しんできたものです。

あの頃は……建造や出撃やらで必要な書類を間違えることがあつて大変でした。

慣れない作業に四苦八苦しながら、それでもここまで来れたのは指揮官のおかげです。

「綾波、それで最後だ」

あれ……もう終わりです？

「今日は少なかったです」

本当に珍しい。昼を少し過ぎた頃で終わるのは久しぶりです。

「まあ今日はな……取り敢えず、昼飯にするか？」

「勿論です。早く食堂に向かうです」

食堂はここからそこまで遠くありません。指揮官の隣を歩きながら食堂へ向かいます。

今日は何を食べましょうか……普通に定食でもいいし、丼物も捨てがたい。麺類も悪くありません……悩むのです。

「綾波、悩んでるのならカレーにしないか？」

カレー？ カレーは……この前食べましたが指揮官も食べるのならいいです。

「指揮官もカレーを食べる、です？」

「ああ、あそこのカレーは美味しいからな。週一で食べている」

確かにカレーは人気です。他の艦隊の指揮官もカレーをよく注文しています。

ただ、カレーばかり頼んでくるのでたまには他のものを食べたくなることもあります。

「指揮官、魚雷天ぷらも食べたいです。」

「カレーと天ぷら合うのか？ まあいいが……」

食堂のお姉さんに料理を注文し待っているとジャベリンちゃんとラフィーちゃん、そしてZ23^{ニー}ちゃんがやって来ました。

この三人は綾波がいつも一緒に遊ぶ友達なのですが……最近の悩みはラフィーちゃんにも改造が来たので未改造組がニーミちゃんしかいなくなってしまうことです。

本人は気にしていないと言っていますが、ニーミちゃんと一緒に出撃すると……敵が次々と爆散していくところを見るに、やっぱり気にしているんだなと感じます。

こればかりは技術開発の人達に頑張ってもらうしかないのですが……と、話が逸れたのです。

「こんにちは、指揮官。ちゃんとお仕事していますか？」

「今日は仕事が少なめだったからな。ちゃんと今日の分で言えば終わってる」

「指揮官指揮官、お昼ですか？ 一緒に食べましょう！」

「いいぞ。俺らは注文してるからお前も頼んでこい」

「指揮官……代わりに頼んで」

「面倒くさがらず頼んでこいラフィー」

「指揮官の意地悪……」

……この皆も艦隊全体から見たら初期の方からいます。……だから、練度も当然高いですし指揮官とも仲が凄くいいです。

……嫉妬とかはしてないです。たまにジャベリンちゃんとかよく指揮官にくつついてますけど、羨ましくなんかありません。……ありません。……ありません。

「……指揮官」

「なんだ？」

「綾波を……ナデナデしてもらってもいいですか？」

「……まあいいが」

指揮官のナデナデは変な感じがするのです。とつても暖かく感じて……でもその暖かさだけじゃ物足りなく感じて。

昔はこういう事はなかったのに……ただ、これもいいと思っ
て自分がいることは確かなのです。

昔、本当の駆逐艦だった頃感じた……仄かな暖かさと似てい
る。

この暖かさはきつと悪いものじゃありません。

「あー！ 綾波ちゃん指揮官になでもらってる！ ジャベリン
にもしてー！」

「ずるい……ラフィーにもして……」

「あー！ ジャベリンちゃんもラフィーちゃんもいきなり走ら
ないでください！」

この友達と過ごす日常も指揮官のナデナデと同じくらい暖か
くて……ずっと守っていきたいと思う宝物です。

「ナデナデは綾波だけのものです」

「何を言ってるんだ」

でもナデナデは譲れないのです。

あの後指揮官も巻き込んで皆で遊びました。ニーミちゃんが卓
球で強かったり、ねぶねぶから譲ってもらったゲームで遊んだり、他の
駆逐艦の子と合流してドッジボールをやったり……楽しかったです。

こういう遊ぶ余裕がある、というのは大事なことです。……働き詰
めでもいいことはないからです。

「指揮官、今日もお疲れ様でした」

「おう、お疲れさん、と言いたいところなんだが、綾波はこの後暇か？」

何かあるようです。別にこのあと誰かと特別な用事があるわけ
はないですから……

「何かするのです？」

「俺がこの司令部に着任してからもうすぐ半年だし、ちよつとした
パーティーを計画しててな。それを手伝ってほしい」

指揮官は親交を深めるためにこういう節目で毎回パーティーを開

きます。勿論ずっと前からいる私にとってはいつものか、みたいな感じ
じです。

「分かりました。何処に向かえばいいです?」

「俺の部屋でいいかな。メンバーはいつもの感じだからよろしく」

いつもの感じと言うと……いつもの三人やポートランドさん達と、
寧海さん達。レパルスさんや、ユニコーンさん、テネシーさんもいそ
うです。

このメンバーはずっと最初の頃から指揮官のもとで戦っているの
です。

今は第一線から退いているレパルスさんやテネシーさんはあとか
ら来た戦艦や巡戦の人達に指導を行ってますが……昔の私達はかな
り頼ってたのです。

指揮官が指揮に慣れていなかった頃でも、二人の砲撃はかなりの命
中率でして、綾波達の道を切り開いてくれたのです。

他の人たち、ポートランドさん達や寧海さん達は姉妹でセットに
なつてよく編成されていて……残り一人の所に私が入ることは少な
くなくなりました。

ポートランドさんはインディアナポリスさんを凄く推してきます
し、インディアナポリスさんはそんな姉を冷たくあしらってますが……
満更でもなさそうでした。

寧海さんは平海さんと肉まんをいつも食べている気がしますが、海
域では頼りになります。二人ともいつも綾波を気にかけてくれてと
ても嬉しかったです。

ユニコーンさんは静かな人ですが……いつも支援空母でサポート
してくれるすごい人です。いつも主力艦隊に編成されている辺り、指
揮官の信頼が見えるのです。

まあ初期勢というの他にもいるのですが、主に召集されるメンバー
はこんな感じですよ。

全員が全員出撃したわけではないですから……ずっと、遠征しかし
ていない子もいます。

指揮官いわく、育てたい艦が多すぎて間に合わない、らしいのです。

……じやあ出撃を増やしたらどうです、と聞いてみたところ、燃料が五千以下になると不安だから……、とのお返事。

……確かにその気持ちは分かるのです。昔からそういう管理をしてきた身にとって、燃料が半分以下になると不安を感じるのには仕方ないこと、です。

まあ指揮官もそういう出撃出来ない子とは別の形でコミュニケーションをとっている様ですし、問題ないです。

「あら、綾波じゃない。これから指揮官のところへ行くの？」

「綾波……こんばんは」

寧海さんと平海さんだ。……いつも持つてる肉まんはどこから仕入れてきているんです？

「こんばんは、寧海さん、平海さん。そうです、綾波はこれから向かいますか……お二人も？」

「まあね。指揮官の財布のひもは私が握ってないと緩みに緩んでいきそうだから……全く、手のかかる人ね」

「でも姉ちゃん……この前指揮官とお話してた時、すつごく嬉しそうだったよ？」

「そういうのは言わなくていいのー！」

寧海さんはいつも指揮官に、節制をするように、といつも忠告しているのです。

それで指揮官とちよつとした喧嘩になることはありませんが……仲間直りしたあとは二人で肉まんを食べてます。

平海さんは……静かに指揮官の側にいることが多いです。

最近自分より指揮官を優先する……と寧海さんが愚痴ってた事もあるように、平海さんは指揮官の言うことをよく聞きます。

冗談もそのまま受け取っちゃうから困ってましたね……まあその素直さが平海さんの良いところだと思っうのです。

「綾波、ぼーつとしてないでさっさと行くわよ？」

「着いてきてね」

「あ、今行くのです」

今は取り敢えず、パーティーの準備をしましょう。

そこそこ準備が終わったところで綾波も帰る……筈だったのですが、指揮官に止められました。

何かあるのかと思ったら指揮官は何かを見ていて……それは。

「指揮官?」

「ん……どうした綾波」

「指揮官が持つてるそれは……」

私と、指揮官が出会った時に明石さんに撮られた写真……記念だ、と言われて撮られたもの。

懐かしく感じる所に、時間の流れを感じるです。指揮官は今となつてはたくさんの子を指揮しているのです。

……昼の事に考えていたことを思い出します。はい、あの時綾波は嘘をつきました。

指揮官は分け隔てなく皆と接します。それはすごく良い事で……綾波もそういう指揮官の下にいれて嬉しいです。

その一方で、それをして欲しくないと感じる自分も居ます。こんな事は間違つてるといふのに……

「……波、返事をしろ綾波」

「!ど、どうしたです?」

「この様子は話を聞いてないな? まあいいが……」

こんなことを考えていて……指揮官の大事な話を聞いてなかったと分かるとシヨックです。

「この話をもう一回するのは凄く恥ずかしいんだけどな」

「……? 恥ずかしい、です?」

「そりやな。もう一回このセリフを言わせるなんて罪なやつだよお前は」

「このセリフ……?」

「俺が一番お前を信頼している。だからこれからも絶対に……俺のもとに帰ってこい」

「し……きかん……？」

それは、そのセリフは……

『安心して、今度こそどんなことがあっても生き延びて指揮官のもとに帰るのです……だって、指揮官にはまた会いたいんですもの……』
……この言葉、忘れたとは言わないよな？」

あの時、クリスマスにもらった《あるプレゼント》を貰ったときに、綾波が言った……

「その時は戦力増強……ってことだけ考えていて綾波達から貰う愛を見てみぬふりしていた。ああ、俺は馬鹿だからな」

他のある5人にも渡されたその《あるプレゼント》は…指揮官の言うとおり、強くなるためのアイテムとしてプレゼントされた。

嬉しかったですけど……本当の意味で欲しかったのは誰でも同じ。
「でもやっとなついていたんだよ。こんなに時間のかかる馬鹿野郎で……すまない」

「本当……です……指揮官は……馬鹿、です……」

綾波はいつも指揮官の隣で、指揮官の頑張りを見てきて……そうしたらいつの間にか……

「綾波。俺は、綾波のことが本当に好きだ。《誓いの指輪》は他にも渡してしまっただが……」

「……そうですね。六股とか、かつこ悪い、です」

「うっ……そう言わないでくれ綾波……」

「でも、そんなのはどうでもいい、です。綾波は優しいので」

本当はどうでも良くないけど。大事なものはもつと別。

「……そうだな。それは昔から知っている」

「ずっと指揮官を支えてきました」

だからモヤモヤしたです。貴方が誰を選ぶのか不安で。

「それに何度助けられたことか」

「だから……この気持ちには早く気付いてほしかった……です」

綾波はずっと悩みました。指揮官がこの気持ちをどうしたら受け止めてくれるのか。

「俺は臆病者だったんだ。……許してくれ」

「これからもずっと一緒、です」
「ずっと一緒じゃなきゃ嫌、です。」

「ああ、ずっと一緒だ」

「だって」

「何故なら」

「指揮官アナタのことが、好きですから……」

「綾波オマエのことが、好きだからな」

……よし。

「言質、とったです」

「信用してくれよ……」

「三ヶ月待たされた身になってほしい、です」

さつきまで嫉妬やら何やらを考えてた自分が馬鹿みたい、です。

……今私はとても……とても舞い上がってます。ええ、ちよつとおかしいかもしれないですけど問題ないです。

「逃げちゃ駄目ですよ？」

「逃げるか！ というか綾波その手は……」

おかしくなる前に。これだけはちゃんとしてほしい、です。指揮官も男性ですから。

「もう一度はめて……です。この、指輪を」

「……ああ、分かったよ」

そうして左手の薬指につけられたその指輪は……

眩しすぎて……見れませんでした。

「お、おい。泣くな綾波」

「静かにする、です。指揮官……今は……」

この幸せを噛み締めていたいから。

ユニオン 重巡洋艦 インディアナポリス

はい?……指揮官、私はインディアナポリス。ニックネームはイン
デイよ。え、核爆弾?それ、何?

「インデイちゃんかわいいいいい!」

「……お姉ちゃん、うるさい」

今日もお姉ちゃんと一緒にぶらぶらしながら時間を潰してる。

お姉ちゃんは何時でも私を見てる。流石にお手洗いとかにはついてこないけど、1日に何十回かは必ずお姉ちゃんを見る。

お姉ちゃんに『なんでそんなに私のことを気にするの?』って聞いたら、『インデイちゃんが可愛いのがいけないんだよ! インデイちゃんは世界一だからね!』って言われた。

毎回毎回、私よりお姉ちゃんの方が可愛いと思うんだけど……いつも言う前にお姉ちゃんがテンション高くなり過ぎてこっちの話を聞いてくれなかったりするから伝えられない。

……うん。まあ、嬉しくないかと言われれば嬉しい。でも、私と一緒にいて良いのかという心配もある。

お姉ちゃんは私と違って明るい人だから、その明るさで他の人に話しかけに行ったら、きつと人気者になれる。

私は……あまり、他の人に話しかけることができない。何が悪いのか分からないけど、私を見ると苦笑いして去ってしまう人もいる。

でも、そうじゃない人もいて……

「おはよう、インデイとポートランド。今日も二人で散歩かしら?」

プリンツ・オイゲンさんはその内の一人。ここに着任した時期が偶然ほぼ同じだったから、同じ重巡として頑張ってきた。

「おはよう……プリンツさん」

「おはようございます! プリンツさん! 今日もインデイちゃんかわいいでしょっつ。」

「ふふ……そうね。それにしても、相変わらず二人は仲がいいわね」

彼女は「オトナ」の女性っぽくて……私が中々上手く喋れなくても、静かに待ってくれるの。だからプリンツさんとは仲良くなれたし、静かな人なのに色んな人とよく話しているのはいいなあ、と思う。

私もそうなれたらいいのにな……

「暇ならちよつと遊びにいかない？ きつと楽しいわよ」

「どこへ行くんです〜？」

「何かお菓子を作るベルが作ったと聞いたの。それを配ってるようだから、調理室へ行くのよ」

お菓子……この前はロールケーキを皆で食べたな……

「それはいい……一緒に行く」

「私もお菓子ほしいのでついていきますね！」

甘くて美味しいものは逃せないと思うの。

—————

「あら、プリンツ。ようやく来たのね……とそちらは、ポートランドとインデイですね」

「連れてきちゃったけど問題ないかしら？」

「全然問題ありませんよ」

「なら良かったわ。さあ、行きましょ？」

ベルファストさんはロイヤルのすごいメイドさんで、戦いでも頼りになる人だ。普段はよく女王様やヴォースパイトさんと一緒にいて女王様のお世話をしている。

「今日はクッキーを作りました。紅茶も一緒にいかがですか？」

「頂くわ。……ああ、貴方も一緒に食べるのよ？」

「私はメイドですので……」

「ロイヤルの所にいるなら文句は言わないけどここは私達しかいないのよ？……ここにいる時くらい息抜きしなさい」

「……はあ、分かりました」

「貴方がロイヤルのメイドであることを誇りに持つてるのは知ってる

けど……」

「全く……貴方には敵いませんね」

プリンツさんは私より遅くここに着任したのに私から見てもすつごく頼りになる人。提督をからかっている姿もよく見るけど、それにしたって提督の緊張をほぐすため。

私には真似出来ないし……羨ましい。あれ位気配りが出来たら、皆の支えになれるし、お姉ちゃんにも心配させなくてすむ。

何より、指揮官に頼りにしてもらえる。ここまでこれたのは指揮官のお陰だから、これから少しずつでもお返しをしていきたい。

「それにしても、この艦隊も随分と大きくなったわね……」

「ご主人様が着任してからもう数か月です。様々な特殊海域イベントに出撃してきて、たくさんの方を連れてきてますし、ね」

「指揮官もなんだかんだ言っただけで今までの子はほぼ全員捕まえてきてるのよねえ……」

「私はインディちゃんと一緒にいらればそれでいいの！」

「あなたには聞いていない（です）」

「……とても、賑やかになった。良いことだと、私は思う」

どこに行っても誰か他の人がいるというのは……結構安心感のあるもの。……静かなところは嫌いじゃないけど、一人でいるのは嫌だな……

「それはそうですね。かつての仲間と出会えて嬉しいのもあります。が、当時の敵と仲良く同じ艦隊に所属しているのも不思議な話です」

「着任当初からすつと瑞鶴はエンタープライズを追いかけてるし、駆逐の子たちは打ち解けるのが早いわ」

「インディちゃんの良さを分かってくれる人も増えて私的には大満足です！」

「本当にあなた妹のことが好きね……?」

「私のインディちゃんは世界一かわいい！　そしてインディアナポリス級のほうに私はなりたい！」

「お姉ちゃん……恥ずかしいからちよつと静かにして……」

「だってこれはお二人にインディちゃんのかわいさをアピールするチャンスですよ!?お姉ちゃんとしてこのチャンスは見逃さない!」
「はいはい、私たちはもう十分に理解してるから今はやめときなさい。妹に嫌われるかもしれないわよ?」

「そんなことありえない! ありえないけど……その前に聞き逃さないことがあります。十分に理解してるというのなら試させてもらいますよ?」

「お二方、その辺に……」

「いいのよベル。これは彼女なりのコミュニケーションよ?」

「インディちゃんがかわいいと思ったところについて語ってみてください! その内容によってインディちゃん理解度を測ります!」

そんな理解度初めて聞いたよお姉ちゃん……

「あのお人形さんを抱いて寝る写真、かわいかったわよインディ? インディもお人形さんみたいにかわいいと思うわ」

「!?」

そんな写真撮ってたのお姉ちゃん!?

「ああでも、あそこまで薄着だと危ないわよ? もし指揮官に見つかったら……襲われてるかもね?」

「!!」

指揮官に襲われる!? あっ、でも……それは、それで……

「そんなこと私が許しません! インディちゃんを一番愛しているのは私ですから!」

「いつのまにか指揮官と一緒に襲ってそうね」

「え!?! あっ……その手がありましたね!」

「これ以上はインディが困りますからおやめなさいポートランド。好きなのはわかりますが、行き過ぎると妹によくありませんよ?」

「……まあ、プリンツさんのインディちゃん理解度が高めなのは分かったので良しとしましょう!」

「ふふ……仲間のことはちゃんと理解してるわよ。だから心配しなくていいわ、ポートランド」

……お姉ちゃんはすごい話せていいなあ……私もお姉ちゃんや指

揮官のことについて、いっぱい喋ってみたい……

「さて……お菓子もそろそろ切れそうですし、そろそろお開きにしましょうか?」

「そうね……時間もいい感じだし、解散にしましょ?」

「お菓子おいしかったです! ありがとうございます! インディちゃん今度はどこへ行く?」

「……元々ぶらぶらしているだけだったから……特に予定もない。どうしようかな……」

「行くところのないのなら学園へ行ってみたら? 何かイベントがあるってグリッドレイが言ってたわよ」

「そのイベントというのは不定期に開かれているゲーム大会ではないでしょうか。東煌の方々が発掘していたものや、ロングアイランド様が持っている対戦型ゲームで遊んでいるそうです。陛下も前行かれたことがあるので知っています」

ゲーム大会……面白そう……

「……お姉ちゃん、行こう?」

「ついていくよー!」

—————

……結構人がいるなあ……やっぱり人気のイベントなのかな?

「この機会にインディちゃんの素晴らしさをみんなに教えに!」

あつ、お姉ちゃん……あつという間に消えちゃった。……どうしよう、一人になっちゃった。と、とりあえず、イベント会場まで行ってみよう……

「ん……? インディちゃんじゃん! やっほー☆」

「あつ……ヒューストン……」

彼女はヒューストン。いつも賑やかな人で……よく指揮官や皆を振り回してる。それでも本気で嫌がることはしないあたり、彼女もよくできた人だと思う。

「インディちゃんが人が多いところに来るなんて珍しいね! イベント

ト目当てで来たのかな？」

「うん……ゲーム大会なんて……行ったことなかったし……」

「じゃあさじやあさ、一緒に回ってみない？」

「……私が一緒に……いいの？」

「いいに決まってるじゃん！ ほら、行こう！」

うん、こんな感じでいつも巻き込まれているけど……こういうのも、悪くない。

そうして二人で歩いていると撫順と雷ちゃん、電ちゃんがいる。対戦型のようだけど……普通二人じゃないの？

「ふっふん、ロングアイランドちゃんにならともかく、ぼつと出の貴方たちに負ける私じゃないよ！」

「このままだと負けちゃう！ 電ちゃん、助けて！」

「電はゲーム下手ですから……諦めちゃってください」

「そんなく！」

……電ちゃん、諦めるの早いよ……でもまあ……苦手なら仕方ない、のかな？

「インディ、私たちが助けてあげようよ！」

「えっ？ でも……」

「大丈夫大丈夫、きつとなんとかなるって！」

いや……ああいうものは基本一人だけって……ああ手を引つ張らないで。

「雷ちゃん、助けに来たよ！」

「ビューストンさん！ それにインディアナポリスさんまで！」

……聞きたびに思うんだけど……私の名前長いよね……って、今はそんなこと言っている場合じゃないや。

「助けにって言っても……何をすれば……いい？」

「えっ？ えーつと……私を応援して！」

「……そんなことでい「分かったよ！」 ええ……」

……それって本当に手伝いしてる……？ 他の観客と一緒にじゃ……？

「違いますよ」

……えっ？

「……口に出してた？」

「いいえ、でも言いたいことが何となく顔に書いてありましたよ」

……うう……恥ずかしい。

「改めて言うと、確かに応援というのは目に見えるお手伝いをしていくわけではありません。ありませんが……でもその応援というのは、『その人の努力を私は認める』と言う事を分かりやすく表現しているものでもあるのです」

……『その人の努力を認める』……？

『あなたは一人じゃない、私もついてるよ、だから頑張れ！』……そういう気持ちのこもった応援は他人から見ても目を見張るものがあったりしますし、応援されている側にとって、何よりもありがたいものです」

……分かる、気がする……そうだ。私もいつも……応援してもらっているじゃないか。他の皆に……そして……お姉ちゃんや指揮官に。

「頑張れー！　そこだ雷ちゃん！　←↓↓ABだ！」

「分かった！　これで、どうだー！」

「あつ、ちよちよ待って、今ので体力が……」

「これで……『ちえつくめいと』よ！」

「ああー！」

「やったね雷ちゃん！　すごいよー！　かつこいいぞー！」

「ビューストンさん、ありがとうー！」

雷ちゃん……あそこから勝ったのね……体力差見ても5割はあつたはずなのに……

「あそこまで応援で力を出せる人も珍しいですけどね」

「……本当だよ……でも……」

……ああいう子を見習いたい。ずっとそばで支えてくれたお姉ちゃんや……指揮官にお返しをするためにも……私は……

「……これからどうします？」

「……まずは……あの二人を応援しよう？　雷ちゃんだけじゃなく……撫順も一緒に」

「……素敵なお考えです。じゃあ、一緒に応援しましょう?」

その後は撫順が勝ち、またその後に雷ちゃんが勝ち、またまたその後には撫順が……って続いたから、二人のスコアが並んだ……次の勝負で決めることにしたら……ダブルKOが出て引き分けになった……そんなことも、あるんだね……

—————

あの後分かれて……今は寮舎に戻り中。お姉ちゃんは……いつか帰ってくるだろう。……もしかしたらいつの間にかすでに後ろにいるのかもしれないけど……

「インディじゃないか」

「あ……指揮官……」

向こうから指揮官が現れた……お風呂上りなのかな……髪が濡れている。

「一人でいるのは珍しいな。ポートランドはどうした?」

「ゲーム大会の時に……はぐれちゃって」

「ゲーム大会? ……成程。ちなみに、お前もその大会には行ったのか?」

「うん……雷ちゃんや電ちゃんや撫順、ヒューストンと一緒に遊んだ……」

「珍しいメンバーだな」

そういつて指揮官は少し笑う。……うん、確かに珍しいかもしれない……

「応援しているだけだったけど……でも、楽しかったよ」

「……それは良かった」

「それでね、指揮官」

電ちゃんと話したことを指揮官にも話す。私が感じたことも含めて。

「だから私は……もうちょっと、積極的に話そうと思う。難しいけど……足踏みはそろそろやめる。だから、前の相談は……気にしなく

「て、いいよ」

「……そうか、そうか。……いいんだな？ その言葉、信じて」

「うん……でも……指揮官も、協力してね？」

「当たり前だ。出来ることなら何でも言ってくれ、力になろう」

「お願い……じゃあ、またね。指揮官」

「ああ……おやすみ、インディ」

すぐ変わるのには難しいけど……少しずつでも変わればいい。そうすれば、きつと……

「……なんだ。俺がアドバイスしなくても……あの子はちゃんと歩いているじゃないか……だったら、俺も頑張らなくてはな。……そしてそれは君もだろう？ ポートランド」

「……当たり前ですよ指揮官。何だって私は、インディちゃんのお姉ちゃんですから！」

後ろのあの二人を……守ることが出来るよね？

ユニオン 軽空母 ロング・アイランド

へへわたしロング・アイランドというの。こんにちは指揮官さん
実はわたしにはもう一つの名前があるの、知りたい？

「へへへ今日は何をしよーかなー？」

いつもの様に溜まっている積みゲーを漁るロング・アイランドさん。この時間もまた楽しくて……パワ○ロも新しいのを買ったままだし……MUG○Nをもっと極めるのもありねーああつでもでも……モ○ハ○ワールドも進めたいし……

「悩みなあ……」

なかなか決められないなあ……でも、そろそろゲームを始めたい時間……あれ、この声は……

「この書類を頼む、ブルックリン」

「かしこまりました、指揮官」

むむう……今日も指揮官さんは忙しくしているのね……もし指揮官さんが過労死してしまつたら、ロング・アイランドさんの未来が危うい！

「指揮官さん、だめー！」

「むっ？ どうしたロング・アイランド？」

「いつも働いている指揮官さんは、今すぐ休むのー！」

「そう言われても今日の職務がだな……」

この前もそう言って遅くまで働いてたでしょ、指揮官さん！ 指揮官さんにずーっと憑いているロング・アイランドさんには指揮官さんの体調なんてお見通しなんだから！

「指揮官、残りの事務程度でしたら私でも処理できます。それに、私は外交官ですのであまり口で言うつもりはありませんでしたが……最近の指揮官は働き過ぎです。少しは休息を入れてもよろしいのでは？」

「だが……それでは上に立つ者としての責務を果たせないだろう？」
「部下でできることは部下に任せるのも必要です。貴方が倒れた時に艦隊が機能しなくなったりしたら笑えません。そういう時のための予行と考えてみては？」

「ふむ……まあ、それならいいか。後は頼むな、ブルックリン」

「ご安心ください。プロですから」

ブルックリンさんは頼りになるね〜でも、わたしの言うこともしっかり聞いてくれない指揮官さんは駄目だよ〜？

「ほら指揮官さん、そうと決まればロング・アイランドさんの部屋に来て！ やりたいことがあるの！」

「はいはいわかったよ。ってこら、手を引つ張るな」

指揮官さんがいるならマルチプレイができる、ってことは……今日はモ〇ハ〇に決まりだね〜

「早く行こうよ〜時間は有限なんだから！」

「俺の貴重な個人の時間も大切にしてほしい」「却下だよ〜」……そうか」

だって指揮官を一人にしたらまた黙ってお仕事始めるもんね〜そういうのは良くない良くない。ロング・アイランドさんがしっかりと指揮官を癒してあげないと〜

「そつちのエリアにモンスター行つたよ指揮官さん」

「分かった、とりあえず罾と大タル爆弾を設置しておくか」

指揮官さんはこういうアクション上手くて一緒にやると楽なの〜綾波ちゃんもうまいんだけど、この分野においては指揮官さんに及ばないようね〜まあもちろん？ 一番うまいのはロング・アイランドさんだけだね〜

「もう足引きずってるじゃないか、ここまで準備する必要はなかったな」

「気を抜いちやだめだよ〜指揮官さん。そう言つて前瀕死のモンス

ターに油断して失敗したの忘れたの〜?」

「むっ……それもそうか。せっかく設置したのだし、無駄にならないようにしっかりと使つていこう」

指揮官さんは油断すると脆いんだよ〜この前もふざけて石ころ投げてるから突進回避できずに死んじやつてるし……それさえなければなあ……

「ダメ斬りで……よし、終わったな。?ぎ取りするか……」

「ああん……欲しいのは宝玉じゃないの……頭殻が欲しいの……」

「こつちはその宝玉が欲しいんだがなあ……」

物欲センサー本当にやめて欲しい……製作者側は確率調整絶対に間違つてるよ……

「残念だが、一度休憩にしよう。流石に少し疲れてきた。ちよつとお腹もすいてきたし何か食べるか……?」

「それならポテチがあるよ!」

「前から思うのだが、女子的にはポテチは大丈夫なのか……?」

「ゲームとポテチとコーラのセットは最強だから大丈夫〜」

「おい、返答になつてないぞ……」

もう、指揮官さんは細かいところを気にするなあ……指揮官さんにはこのセットの有用性をもう一度教授する必要があるそう〜

「……そういえばになるんだが、最近学園の授業には出ているのか?」

「うん? 出でないよ〜?」

「そこは出てくれよ……この前ラングレーが怒つてたぞ。教える人が足りない過ぎますわ! つてな」

「ロング・アイランドさんは人に教えられるほど上手くないよ〜?」

「この前何回もスクランブル発動させて海域ボスへのとどめを刺してMVP搔つ攫つたの忘れたとは言わないよな?」

「何のことかな〜?」

指揮官さんったらおかしい人〜護衛空母としての支援が得意なロング・アイランドさんがMVPとるなんてそんなことあるわけないよ〜

まあもしかしたら? 直前にやった音ゲーが上手くないかなかつた

どこかの幽霊さんが不機嫌なせいで目に付いた敵全てに向かつて可愛い可愛い艦載機を飛ばしてたかもだけど、ロング・アイランドさんじゃないね〜

「とにかく……まあ今度は出てやれよ？ 俺としては教師としての前にも期待している」

「そういうのずるいよ指揮官さん……はあ、しょうがないから今度出てあげる〜」

「助かるよ、ロング・アイランド」

またみんなの前でコミュニケーションを被らないといけないようね……！
みんなに好かれると大変だ〜

「……何だかんだ言ってやっぱり面倒いいよな」

『護衛空母』として働いたロング・アイランドさんだよ？ 他の人のことはちよつと気をつければちゃんとして把握できるよ？ すごいでしょー！

「……そうか、それは本当に、すごいな。うん、偉い。ありがとな、ロング・アイランド」

「じゃあわたしはこのまま引き「だめだな」……せめて最後まで言わせてよ〜」

いいじゃない、ずっと引きこもってる夢見たって……ニート最高、無職最高！

「だからお前が最初ここに来たのかもな」
「どういふこと〜？」

「俺から言わせてもらおうと、正直お前は他の誰よりもこちらの文化に染まってると思う。勿論、良い意味でな」

「そうかな〜？ 電ちゃんや雷ちゃん、明石や夕張あたりも結構詳しいと思うけど〜？」

「電や雷は確かにそうだが、あの子達の詳しさはちよつと違う。どちらかと言うと俺たちが見えていない、隠されているものに詳しい感じだろう。そして明石や夕張の特定分野に関しての興味はそれこそ目を見張るものがあるか、俺たちに理解できるものかといわれると難しい。……だからこそ、こちらの文化に詳しいうえに、空母で遠距離ま

で索敵可能なお前が来たんじゃないか、と俺は思う」

……ロング・アイランドさんをちよつと買ひ被りすぎじゃないかなあ……いや、期待してくれるのは嬉しいよ？ でもね、長く付き合ってるからかな……その期待にこたえられるか不安にもなってくるんだよ？

次から次へと来る子達……皆何かしらの強みを持ってて、中には建造するためにとつもない長い時間をかけた研究を経てこつちに来る超すごい子もいる。そんな中でわたしは何ができるのかな？

不安で不安で不安で……それでも指揮官はこの弱気になつてるわたしをいつもと変わらず引つ張り出してくれる。ロング・アイランドに本来の役目を全うさせてくれる。外部から見ると女の子に戦わせるなんて！ つて思う人もいるかもしれないけど……

ロング・アイランドたちは『女の子』である前に指揮官の下で戦う『艦船』だ。もちろん、気を抜く時はわたしもだらーりだらーりとしてる。それでも……

「何難しい顔しているんだ。せつかくのかわいい顔が台無しだぞ？」
「ふえっ!？」

ちよつ、指揮官さん！ いきなりはずるいよ！ ちよー恥ずかしいよ！

「お前が心配しすぎる必要はないさ。だって俺がずつと見てきた、一緒に戦ってきたんだ。この戦いの終わりはまだ見えないのは残念だが……お前たちと離れるその瞬間も訪れるのはまだ先ということだ」
「……そうじゃないの、指揮官さん」

わたしは、指揮官さんのお役に……
「なんだ、そんなに心配ならいつそのこと逃げてみるか？ 世界の果てまで」

「えっ？」
「どういう……こと……？」

「お前が何で悩んでるか詳しくはわからないけどな、これだけは言うぞ。お前は俺の艦隊に必要だ。それは、誰かで代用できるものじゃない。お前じゃなきゃダメだ」

「……なんでそこまで言い切れるの?」

「俺のロング・アイランドだからだ。」

「……それだけで? ダメだよ指揮官さん……お願い、わたしに教えて。本当のことを。やっぱり引き籠もってる私じゃ……」

指揮官さんの背中を守るには……

「……じゃあ本当のことを言うぞ」

「……うん。覚悟はできて……」そんなことで悩むな「……え?」

そんなこと……? そんなことってどういうこと……!?

「指揮官さんだつてわかるでしょ! わたしはそんな強い子じゃないって! ほかに強い空母はいっぱいいる! 軽空母にだっていっぱいいるじゃない! わたしの代わりに主力に入れたほうが強い子なんてたつくさんいる!」

「ああ、確かにその通りだ。レンジャー先生にはいつもお世話になってるしユニコーンも戦場で頼りになる子だと評判だな。祥鳳も気配りがよくできる子だし空母ではエンタープライズや翔鶴瑞鶴、赤城加賀などが大暴れだな。戦艦まで含めるとキリがない」

「じゃあなんで……!」

「それでも『ロング・アイランド』はお前だけなんだよ。いつも俺に憑いている船なんて、どこを探してもお前だけだよ」

「それだけじゃん……わたしじゃ……ロング・アイランドじゃ指揮官のお役に立てない!」

……何でこんなことになっちゃったんだっけ……ロング・アイランドは、指揮官さんの疲れを癒したかっただけなのに……これじゃあ指揮官さんに迷惑しかかけてない……

「本当にそうか……? 俺はそうは思わないが」

「……もういいよ、指揮官さん。無理しなくても……」

ああ、違う、口にしたのはそういうことじゃない。謝りたいの。ロング・アイランドは指揮官さんに……

「かつての大戦でのお前の活躍は、目に見張るようなものだったのか? それは他の船でちゃんと役割を果たせるものだったか?」

「それは……」

「確かに戦果の派手さというのは重要だ。一目でどれだけのことを成し遂げたかがわかりやすいからな。でもそれだけに囚われるのもダメだろう？ お前は確かに目立つような子じゃない。でもお前だって頑張ってるんだ。そしてそれを俺が認めている。これじゃ駄目か？」

「……ああ、駄目だよ……これじゃあわたしの負けだよ……」

「ずるい……指揮官さんにそんなこと言われたら認めるしかないじゃない……分かったよ、認める。わたしでも……ロング・アイランドさんでも役に立ててるって信じるよ」

指揮官さんはすごいなあ……わたしの悩みをすっかり吹き飛ばしちゃった。本当は指揮官さんの疲れを癒すためだったのに……これじゃあどつちがストレスを解消させてもらってるのかわからないよ

「もう大丈夫か？ お前の悩みはもうないか？」

「平気平気もうロング・アイランドさんは完全復活したの！ だから指揮官さん、構って」

「だからの使い方間違えてないか？ まあいいが……何するんだ？」

「じゃあついてきて！」

「あ、おい！」

向かう先は寮舎。ロング・アイランドの大好きな飲み物を指揮官さんにも飲ませてあげよう！

「はい、指揮官さん。これをどうぞ？」

「これは……なるほど、『ロングアイランド・アイスティー』か」

アイスティーの味と見た目をお酒を混ぜ合わせるだけで再現しようというカクテル、それがロングアイランド・アイスティー。わたしの名前と同じ島が発祥の地なんだよ

「意外だな。お酒は飲まないものだと思っていたが」

「そりゃあ普段は飲まないよ？ でもこういう時にはお酒を飲んで

サツパリするのがいいでしょ」

「まあ、違くないな。少し湿っぽくなってしまうってだし、空気を変えるのにはちようどいい。それじゃあ……」

「乾杯」

うんうん、この感じがいいんだよね。お酒を進めるのは好きでロング・アイランドはあまり飲まないんだけど、久しぶりに飲むなら全然いい」

「こういうのもたまにはいいな。お酒は普段飲まないが、これからは艦隊の皆とのコミュニケーションツールとしても使えそうだ」

「しーきーカーン、今くらい仕事のことから離れようよ。そんなことしてるとロング・アイランド、すねちゃうよー」

まったく、これだから指揮官さんは心配なの！ いつもいつも仕事のことばかり心配して……もうちょっと私を慰めてくれてもいいじゃん！

「わかったわかった。仕事の話をするのは止める、止めるからちよつと離れる。近い」

「本当にわかってるの？ 指揮官さんは？をつくかもしれないからなく」

「どうしたら信じてくれるんだ……」

「じゃあキスしてよ指揮官さん」

「は？」

うわああ！ 恥ずかしい！ でも言っちゃったからには最後まで……だよね？

「ロング・アイランドにキスして、指揮官さん。今だけでも、『わたし』だけを見てるって証明して見せて！」

『恋』の敵は多いの。だから少しでも、指揮官さんの気を引かなきゃね」

「おいそれは……はあ、全く。それじゃあ……」

あつ、やっぱ指揮官さんちよつと待って顔

近—————

「なんてな、デコピンだ！」

「ふえ!？」

そんな、あそこまでいって酷いよ指揮官さん！　今のは完全にキスする流れだったでしょ！

「残念だったな、そんなに期待していたのか？」

「当り前だよ指揮官！　乙女心をそんな風に扱うなんてひどいよ！」

「すまんすまん、今は違うなと思ってな」

「……どういうこと？」

なんでダメなのかな……やっぱりロング・アイランドさん可愛くないのかな……

「酔った勢いで、っていう感じになるのは嫌なんだよ、たとえお互い酒に飲まれてなくともな。だからまた今度な」

「え、それって……」

「言わせるな、恥ずかしい。もう俺は帰って寝るからな」

「ああつ、待ってよ指揮官さん〜！　まだ聞きたいことがあるの〜！」
キスをしてもらえなかったのは残念だけど、それでよかったかも〜

だって今じゃちゃんとした気持ちを言葉で伝えられないかもしれないかもしれないもの。

私は軽空母のロング・アイランドさん。燃料を漏らしちゃうくらい、怖がらせちゃうすごい幽霊さん！ だけど……あなたの前ではただの幽霊さんでいたいな。ね、指揮官さん？

ユニオン 駆逐艦 グリッドレイ

はじめまして、指揮官！ グリッドレイだよ。サラトガちゃんの護衛なんだ〜！ 彼女って超かわいいんだよ！

「指揮官！ 今日も良い撮影日和だね！」

「撮影日和って何だよ……」

「良い写真が撮れそう日だってことだよ！」

今日はさすがに素晴らしい晴れの日！ サラトガちゃんを撮るには最高のコンディションだよ〜

「そうだ、写真で思い出したんだが」

「ん？ どうしたの指揮官」

「いつもお前は誰かの……主にサラトガの写真撮ってるがお前自体は撮ってもらったことはあるのか？」

「えっ？ いや、少しならあるけど……」

「ほう？ 少ないけどあるのか、それらも俺に見せてくれよ」

「わたしが写ってる写真よりサラトガちゃんの写真を見てよ！」

わたしなんか写ってても何も変わらないし……どうでもいい写真ばっかりだし指揮官にはあまり見せたくないなあ。

「それは見飽きてるぞ……俺はお前の写真が見たいんだ。何で見せてくれないんだ？」

「じゃあこういったほうがいい？ 見せたくないから見せないの」

しつこい男の人は嫌われるよ？ 全く……サラトガちゃんの可愛い瞬間を教えてくれるのは助かるけどこういうところは駄目かな。

「取り付く島もないな……分かった分かった、この件は無かったことにしよう。じゃあグリッドレイ、一緒に他の写真を撮りにいかないか？」

「他の写真って？」

「サラトガちゃんだけじゃなくて他の子も撮りに行こう、ということ

だ。お前の写真フォルダほぼサラトガだけだろ?」

「そんなことはないよ! 約9割はサラトガちゃんだけけど他の子もいるよ!」

「ほぼじゃねえか! それなら尚更連れていきたくなくなった、拒否はさせんぞ。上官命令だ」

「横暴だ……と言いたいところだけどいいよ、指揮官がそこまで言うならついて行ってあげるよ」

指揮官は面白いしね。なんだかんだネタを提供してくれるし、面白い写真撮れるかも!

まあ……指揮官の写真もどこかで撮りたいな。一、二枚でいいから。

「そうと決まればさっそく出撃だ。行くぞグリッドレイ、自慢の俊足はもう廃れたか?」

「速さでわたしに勝てると思わないでよ指揮官! そっちこそ置いてかれないようにね〜!」

「待つて、すまん悪かったから待つてくれ」

「あーあー聞こえないなあー指揮官の声なんて聞こえないなあー聞こえてるだろそれ!」

ふふん、速さでわたしに勝とうと思うなんて百万年早い! 指揮官もこれに懲りたら勝負なんて挑まないことね〜

「はあはあ……と、とにかく本題に入ろう。取り敢えず港に来てみたがあそこにいるのは……クリーブランドか?」

「釣りしてるみたいね。大声出すと魚が逃げちゃうから、あつちに言つてから声かけよう?」

ある程度近づくくとクリーブランドも気づいてくれたようで手を振ってくれる。挨拶を済ませてからバケツを見ると……結構いる。釣り上手いのかな?

「指揮官とグリッドレイとは珍しい組み合わせだな。何か用か?」

「こいつにサラトガだけじゃなくて、色々な写真を撮らせてたくてな。引っ張り出してきた」

「サラトガちゃんしか撮ってないわけじゃないって説明したじゃない！」

「約9割ならサラトガしか撮ってない様なものだろ……まあそんな訳で艦隊の皆を撮ろうとな」

「なるほどなあ……よし、面白そうだし私もついていくよ」

「楽しくなりそうだから別に構わないけど、釣りはいいの？」

「これだけ釣れてれば十分だろ？　これらはあとで比叡に頼んで料理にしてもらえればいい」

「あの人の料理美味しいよね！」

わたしは、料理そこまで上手じゃない……うーん、やっぱり指揮官は料理できる子のほうが好きかな？

「まあ着いてくるにせよ、ここで一枚撮っておこうか。グリッドレイ、タイマーセットするからカメラを貸して」

「え？　あ、うん」

「グリッドレイ、こっちに並んで」

3人で撮った海辺での写真。普段ならこういう組み合わせで取らないだけに貴重な一枚……

「さあ次へ行こう。寮舎辺りに行くか？」

「私もそれがいいと思う」

「わたしも賛成〜！」

3人で雑談しながら話す。最近ロイヤルと重桜の子たちが増えてきたので少しくらい私達ユニオンの仲間が増えてほしいな、エセツクス来ただろ、もつとどーんと増えてほしいの……なんて話をしてたら到着した。

いつもの様に各々がリラックスしてるこの寮舎は指揮官が重桜出身だからか、和室の作りをしている。まあ他の所属の子もこの落ち着く雰囲気は気に入ってるそうね……

「さーて、写真に付き合ってくれそうな子は……」

「あら、指揮官さま？　それにクリーブランドにグリッドレイも、ご機嫌

よう」

「珍しい3人だな。何しているんだ？」

「エンタープライズさんにイラストリアスさん！ こんにちは！」

「写真を撮って回ってるらしいぞ。私は港から合流してる」

わたし達の艦隊で空母の出撃率1、2の2人は仲が良いらしくよくお茶会をしているそうなんだよね。私も御馳走になったことがあるけど楽しかったよ！

ちなみに雷と電が可愛い衣装を着てたので隠れ撮りしてたのは秘密。指揮官に食べられちゃう、って言うのはよく分からなかったけどね？

「それなら、私達でも撮りませんか？ 珍しい組み合わせで撮るのも悪くありませんわ。」

「同感だな。私達で早速……」

「ちよーつと待ったー！」

5人で撮る準備をするとチャールズ・オースバーン：長い！ オースバーンちゃんがビーバース隊を引き連れてやってきていた。

「せっかく写真を撮るならここにいる人で撮りましょ！ そっちのほうがより正しいわー！」

「そうだそうだー！ オーリックたちも混ぜろー！」

「あの、2人とも……注目集めちゃってるよ……」

「面倒い……帰っていい？」

「こんな人にいるなんて……いたずらし放題だよね！」

最後の子はいらないかなあ……いや嫌いつてわけではないんだけどなんかこう……ね？ うんまあ端的に言ってしまうとイタズラ自重して。

「おお、大所帯が来たな。指揮官どうする？」

「どうするも何もオースバーンの言うとおりにしたほうが良いだろう。グリッドレイも、それで構わないな？」

「うん、みんなで良い写真撮れるならね！」

確かに今回は皆とたくさん写真撮ることが目的だけど、たくさんだからといってきれいに撮れてないなんて許せない。そこは妥協

するわけにはいかないのだ。

「わたしが中央ね！」

「どうでもいいから早くしよー……」

「指揮官さん、隣いいー？」

「ス、スペンスも……いいですか？」

「構わないぞ。ほら、サツチャーも大人しくしてな。」

「そんなー……よし、じゃあ指揮官。ほらだっこして！」

「んな無茶な……ちよつとイラストリアス、少し離れてくれ。その……」

「その……何ですか？」

「そこら辺にしておけリアス。指揮官が困っているだろう？」

「あらあら、仕方ないですね。」

「私もあれくらいあれば……って何を考えているんだ私」

「早く準備しないと間に合わないよー？」

なんだかんだ言って撮った写真はきれいにみんな写ってた。確かに、指揮官の言ってた通りこういう写真をわたしが撮ることは少ない。

その後もいろいろなメンバーで撮った。ポートランドさんは相変わらずインデイちゃんを推して一緒に写り込んできたり、鉄血のドイチュラントさんがエイジャックスと一緒に指揮官を弄りに来たり、鳳翔さん、祥鳳さんとのんびりしたり……

「大分写真も増えてきたな」

「そうだねー！ こんなに撮ることになるとは思ってたよ！」

今日だけで何十枚も撮ることになるとは思ってもみなかった。こうやって一つ一つの写真を見てみると……皆本当に良い笑顔で笑ってる。

サラトガちゃんには勝てないけど、それでもすすごくかわいい笑顔。

「どうだ？　こういう写真も悪くないだろ」

「うん。なんで今まで撮ってこなかったのか不思議なくらい……綺麗な写真ばかりだよ」

でもこれらの写真ってちよつと違う。9割サラトガちゃんの写真なんてわたしは言ってたように、実際私も今まで他の子の写真を撮ってこなかったわけじゃない。

他の駆逐艦の事は何度か撮ったことあるし、クリーブランドさんやエンタープライズさんをユニオンの集まりで撮ったことだってある。他の子もそう。

もちろんその写真でも皆笑ってる。ただ、今日撮った写真はその笑顔がまた違うのだ。本当に……それぞれ似合う自然な笑顔。

写真を撮るからとかさういったこと関係無しの、皆のいつもの日常を切り取ったような笑顔。良い写真ってこういう事を言うんだろうか。

サラトガちゃんを撮っている時とは違う興奮。自分の好きな子の可愛いところを見つけるために追いかけてるいつもとは違う興奮を本当は、今まで何度か経験してたはずだ。誰かがいないと、物足りない気がしただけで。

「さて、最後の写真を撮ろうか」

「えっ、誰の？」

「決まってるんだろ、お前だよ」

「わ、わたし？　いやそんなの……」

「お前が写ってる写真見せてくれないからな、俺が撮ることにした」
「そんなことしなくて良かったって良いのに」

……ほんと指揮官はこういう所は駄目だ。わたしなんかいいって言ってるのに、言うことを聞かずに私に色々してくる。わたしは可愛くないって言ってもそんなことないって言ってくる。

サラトガちゃんがいなかった最初期の頃、わたしは他の子よりやる気無かっただろうし、実際それは態度に表れてたはずだ。それでも指揮官はわたしをこき使って出撃させる。

それでちよつとぶつかった事だってある。サラトガちゃんが来る

までわたしは働かないよ、なんて言った時には『じゃあサラトガ呼ぶから待ってろ』

そんなすぐ出るわけ無いじゃんと思つて建造を見に行つてみたらものが見事に当ててきてドヤ顔してくる。……あの顔思い出したらムカついてきた。

でもやつぱり、指揮官に沢山心配かけていたとは思ふ。一番心に残っているのは、何回か出撃して慣れてきた時。敵の弾を避けきれずに被弾してそれを無視して暴れ回つて敵を倒して文句は言われないうでしよつて帰つてみれば怒鳴られた。

『傷ついたなら無茶をせず仕切り直せ、そもそもお前の速さを活かすには無傷で戦場を駆け回る位にならなければいけないだよ』

「ほら、笑えよ。顔が固いぞ、さつきまでの笑顔はどうした」

「やつぱり一人で写るなんて耐えられない！ ほら指揮官も一緒に！」

「俺が？ いや俺は……」

「つべこべ言わずに、ほら撮るから！ 笑つて！」

だから誰にも追いつかれないだけの速さと相手を観察することを覚えた。指揮官に無茶振りを振られた事だつて一度や二度じゃないけど、全部乗り切つてきた。わたしの自慢の速さで。

わたしは写真が好きだ。どんなに速くてもその一瞬を切り取つてそのままに出来るから。自分の好きな一瞬を追いかけるために速くなる必要はないから。

「……うんうん、よく撮れた！ じゃあ早く現象してきて、一人一枚だよ」

「分かつた分かつた。というかお前も一緒に行くぞ」

「仕方ないな……分かつたよ！」

わたしはどれだけ速くなつたとしてもあなたと同じ速度で歩きたいの、指揮官。サラトガちゃんだけじゃない、沢山の綺麗な写真をあなたと撮りたい。沢山の綺麗な笑顔を、このカメラに収めたい。

きつとこの母港はこれまでも、これからも笑顔で溢れてるだろうか。

鉄血 重巡洋艦 プリンツ・オイゲン

ふうん……あんたが指揮官?どこまで楽しませてくれるのかしら?
期待してるわ

今日の出撃を終え解散してから私は、何となく海辺に来ていた。特に何かあるわけでもないが最近はずかしくここにきてしまう。

今日も沈まなかった。誰も沈ませることなく帰投できた。何の問題も無いこの結果が何時まで続くのか不安になる。

ここに来てから暫くになるけど、私自身このぬるま湯の様なふわふわした日常に慣れきってしまった気がする。前の生では、そんなことありえなかったと言うのに。

あの時の戦争……今の人みたいな姿でなく、れっきとした船であった頃の私は……幸運艦なのか、死神だったのか。

あれ程の激戦の中、数々の仲間の死を見送り……戦争が終わってから戦争とは関係ない、核兵器というものの実験で沈んだ。

何の因果があつたのかは知らないが、二度目の生をもらった以上あんな終わりはしたくない。少なくともこの仲間だけは……

「む、オイゲン。またここにいたのか」

「あら、指揮官(こそ)そこによく来るじゃない。お互い様よ」

「違うない」

「何をしにここに来たのかしら」

「別に何も。ただ……ぼーっとしてただけさ」

「サボリ?」

「仕事は終わらせた。別に構わないだろ……」

そう言っ指揮官は私の隣に座る。彼も何か悩んでいることがあるのだろうか、少し暗めだ。

「何があつたのか知らないけれど、働きすぎよ」

「少なくともまだ過労になるほどの仕事はしていないんだがなあ……」

そういうことじゃなくてな」

「ふーん……他の女の子のことかしら？」

「違うからそんな冷たい目で見ないでくれ……装備のことだよ。不知火から仕入れた金色の装備箱から良いのが出なくてな」

「樽では紫色の箱を金色に塗り直してるだけの箱も混ざってるらしいわよ？」

「……詐欺じゃないか」

「そんな事で頭抱えなくても良いのに……」

深刻な話ではないようでホツとする。正直指揮官が気落ちしているところこつちまで影響してくるから……

「昔からオイゲンは頼りになるな」

「指揮官よりは船の時も含めて、色々な経験してるもの。指揮官はまだまだひよっこさんだものね？」

本当はもう私が頼りにしてるくらいなのだけけれど。最初の頃は比べ物にならないくらい、指揮官の実力は向上してきている。

高難易度では指揮官の指示のおかげで切り抜けたところも何度かある。私の使い方、他の皆の使い方を知り尽くして、その場で一番良い答えを出してくれる。

「オイゲンも……何か悩みがあるのか」

「どうしてそう思ったの？」

「君も何か物憂げな顔をしている。それくらいならひよっこにだって分かるさ」

「もう……なら指揮官。場所を変えましょう」

「それで私の部屋に来るのはどうなのかね」

「こつちの部屋にはピッパがいるからうるさくなるし、それなら指揮官の部屋しかないでしょう？」

「本当にそうか……？」

「とにかくそんな事はどうでもいいの。……私の話聞いてくれる？」

「お前のペースでいいからな」

「ふふっ、ありがと」

そして指揮官にぼんやりとした危機感から来る不安を話した。いつか誰か急に沈むのではないか、私は戦場ではないどこかで朽ち果てるのではないか、私は誰も守れずに一人だけ生き残るのではないか……

指揮官は、真剣な顔で聞いている。何度も頷きながら、私が話し終えてから少しして、口を開いた。

「最近の戦鬪の激しさは前と比べ物にならないからな……直接肌に感じて君たちにとっては今更な話だが」

「指揮官は、どうなの？ そういう不安はない？」

「昔からずつと考えてるさ。君たちをKAN—SENとして仲間を迎え入れた、あの時から」

「指揮官ってよく最初の話をするわよね。それだけ昔に何か思い入れがあるの？」

「最初だからこそ思い入れがあるんじゃないか」

「そういうもの？」

「初心にいつも立ち返る。新しい子が来たり、新たな敵が来たとしても基本は初めの頃から変わらない。君たちを指揮して、勝利を刻む」
「本当に指揮官は勝ち続けられると思ってるの？ 誰も失うことなくセイレーンを倒す事ができる……と？」

私には分からない。私達も強くなってきてはいるが、それは敵も同じ。いつも勝ち続けられるわけじゃない。

私は火力が出ないから、敵を殲滅するのは他の子に任せるしかないのが歯痒い。出来ることと言えば他の子に弾が行かないようにこの身で守るのみ。

これが私の役割と理解している。それでも仲間も敵も強くなるのに、この役割だけじゃ足りない。力をつけられないのならまた私は……置いていかれる。

「出来ると信じている……わけではない。私は神ではないからな」
「そう……」

「だからといって立ち止まるわけにはいかない。守るべきものがあるからな」

「守るべきもの……」

「私たちは人間とKAN—SENである前に、軍の人間だ。であるならば……民間人を守るのが使命だ」

「……それだと私たちが沈むのは仕方ないと取られそうね」

「ああ、そうだ。……私は君たちを沈めると分かっているにも出撃させるだろう。救うべき人がいるならば」

「酷い指揮官ね」

「だが……そんな事態を起こさせないように努力するのは私の仕事だ。そしてそれを手伝ってくれるのは君たちだ。違うか？」

「……そう、そうね。私は……そのために生まれてきた」

ちよつと弱気になり過ぎてたのかもしれない。私たちが沈む時、それは歩みを止めた時だ。成長しなくなった時だ。

私たちが守るべき人を守りきれないなんて事態を起こさないように強くなるのだ。仲間を犠牲にする必要が無くなるくらい……

船の時、私が最後に参加した作戦だって、市民を助けるための戦いだった。最後まで抵抗し続けたのは守りたいものを意地でも守るため。

「……どうやら、少しは納得のいく答えを出せたようだな」

「ええ、ありがと指揮官。お陰様でマシになったわ」

「これくらい別に構わない」

「そうだ、この後一緒にお酒でも飲まない？」

「……お前そんなに酒に強くないだろう」

「いいじゃない、酔っちゃっても」

味方が沈む心配をして私が弱いだなんて嘆いても、結局今は変わらない。だったら私に出来ることを尽くそう。指揮官と出来ないことについて相談するのはそれからでも遅くない。

私の得意なことは誰かを守ること。ならば、何者にも破られぬ盾でいよう。後ろにいる誰かのために敵を誰も通さない、そんな盾に。

「仕方ないな、少しだけだぞ」

「話がわかるじゃない」

あなたは最初むかしの私からここまで変えてくれた人。私に誇りを与えてくれた人。絶対に責任をとってもらおう。その代わり、私は艦隊の盾となりましょう。守るべきものを、守りたいものを守るために、私は沈まない。

――――

「指揮官くもう一杯♪もう二杯♪もつと飲んじやえ〜」

「もう酔ったのか……」

「何よそんな顔して、ほらさつきと飲む飲む!」

「ええい押し付けるな酒が溢れる」

やっぱりお酒はいいわね〜飲んでると、さつきまで悩んだのが馬鹿らしくなってきたわね。皆が沈んでしまうかもしれないとか我ながら悲劇のヒロインにすらなれないわ。

……お酒に關しては正月に重桜のお酒を飲んでからはまってしまったのだけどこういうのは鉄血にはあまりないから好きよく指揮官と飲めるから更に美味しいのかもしれないけど!

「オイゲン、さつきから瓶を開け過ぎだ……そろそろお開きにするぞ。」

「しよがないわね〜なら指揮官、おんぶして部屋まで送って」

「そんな事できるわけ無いだろう。というか君歩けるだろ」

「やる気が出ないの。ほら早く」

「ピツパーにまた怒鳴られるのか……」

そう言いながらも指揮官は私を背負ってくれる。……暖かい。背中はこのように広がっただろうか。とても安心する背中。

「匂いを嗅がないでくれ、恥ずかしい」

「私は恥ずかしくないし、この匂いは少なくとも私は好き」

「素面に戻ったときが大変だなこれは……」

もつと彼に甘えたい。今は私だけを見てほしい。そう思っ私は更に彼にくつつく。あててんのよ、なんて。

「急にどうした。落ちないような背負い方にしてる筈だが」

「離れたくないの。それくらい察しなさい」

「んな無茶な……」

二つの鼓動を感じる。私のものと、指揮官のもの。私のものはかなりの速さで打っているのに、指揮官はあまり変わってなさそう。ずるい、ドキドキして欲しい。

首筋に顔を埋める。彼の匂いで満たされる。それで私は幸せになっちゃって、安い女だな等と頭の片隅で思いつつ、やめられない。

「これはもう部屋に送れないな……仕方ない、ここのベッドを使いなさい。私は」

「あんたもここで寝るの。当たり前でしょう」

「その当たり前大分おかしいな？」

何時から指揮官のことを気になり始めたのか……そうだ。Z23^{ニーミ}が私に指揮官の働きを懇切丁寧に説明しながら私に説教してきたから。

指揮官は頑張ってるのに貴方ときたら……なんて言われちゃったから、どれだけ頑張ってるのかこの目で見たくなったのよね。

ちよつと不器用だけれど、やりやすい方法を模索し続けている姿がちよつと可愛くて、それ以降気分が乗ったときに手助けして……

私から沢山の事を教えたつもりだったが、同時に指揮官にはたくさんのお話を教えられた。そのせいで私がただのプリンツ・オイゲンではなく、指揮官のプリンツ・オイゲンになった。

ここが私の新しい場所で……わたしの守るべき場所なのだとか心に刻んだ。それと同時に指揮官は私の心に入り込んできたのだ。特別な存在として。

「じゃあおやすみ指揮官、離れちゃだめよ？」

「分かった分かった、おやすみオイゲン」

だから私も彼の心の中に入り込めてたら嬉しい。本当に私が一番守りたいものは……あなたなのだから。

「ん……あら、もう朝なのね」

窓から少し日差しが入り込んでいる。隣を見れば結局何もせず寝たままの指揮官がそこに……はあ、私って魅力ないのかしら。

私は酔ったりはするが、それでも意識はあるし記憶もある。ちよつと心の中で思っていることが口に出やすくなるだけで酔った私が誘っているのはただ本心を明かしてるだけだ。

それでもこの理性の塊はまったく……好きな人じゃないと手を出さないのは分かっているのだけれど、女心を分かっただけほしいわね。

「寝顔を見ていられるのは幸せなんだけれど」

どうしたらこの好意は伝わるのかしら。好きってはつきりいうのは負けた気分になるから嫌なのよね……なんて、こういうことを考えている今が私は好きだ。

船だった私が、普通の女の子みたいに誰かを好きになってどうしようか悩んでるなんて……誰が想像しただろうか。

きつとこれからも悩み続ける。どんな結果になるかは分からないけれど、それでも私は歩み続ける。指揮官と共に。

今は鉄血の仲間だけじゃない、沢山の仲間がいる。共に、この幸せを守ろうとする人がいる。今度は絶対に負けない、例え弾も燃料も尽きようとも私は生き延びよう。

「うん……もう朝か、おはようオイゲン」

「おはよう指揮官。まったく、あんたは男なのかしらね」

「朝から何の話をしているんだ、ほら支度するぞ」

「分かっているから……その前にこつちを向いて？」

彼が振り向くと同時にその唇を奪う。こんな大胆な行為を朝からするなんて、まだ酔っ払ってるのかもしれない。

でもさつき思いついてしまったのだから仕方ない。私という存在を指揮官に残すにはもう言葉だけでは足りないと思ったから。

「オイゲン、お前……」

「したくなってしまうたの。嫌だったかしら？」

「……君は構わないのか？」

「構うはずないじゃない。ここまで来て分からないなんて言わせないわよ」

「昨日我慢してた私が馬鹿らしい、狙ってたな？」

「気づくのが遅いのよ鈍感」

そんな鈍感を好きになっちゃった私も私だ。だからこれからはもうちよつと素直に甘えてみよう。お酒を飲んでいるとか関係なく。

前から変わってしまったと思った私だが、もっと変わる必要があるんだと思うと少し笑えてくる。まだまだ満足するには早いんだなつて。

「鈍感な指揮官には、しょうがないから私がついてあげるわ」

「頼むぞオイゲン。これまでと同じように、これからも」

「当たり前よ。だから離れるんじゃないわよ？」

ゆっくりでいい。ちよつとずつ歩み寄るだけでいいのだ。この先の道はまだ誰にも決められないのだから。